

詩同人誌評
第2回
同人同士のいい緊張感
中塚 鞠子

先日ある出版社の人に頼まれて詩集の書評を書いた。作者は全く知らない人で、情報がないのは少し心配だったが、杞憂だった。読み始めると詩が読み手の私に真つすぐに向かってくる。気持ちのスーッと伝わってくる。技巧を凝らした詩に疲れ気味だった私には、やすらぎに思えた。

詩が上手いというのはどういふことだろう。確かに時代を作ってきた詩人たちがいる。それはそれで認めよう。だが、人はどんな時に詩を書くのだろうか。どんな時に詩を読みたくなるのだろうか。苦しみもがく時、悲しみに沈んだ時、心が折れ気力がなくなつた時、喜びに満ちた時。事情も経験も状態も違うけ

れども、書き手と読み手は同じ方向を向いたり、向き合ったりしているのではないかと。たとえば簡単だが、そう単純なものではないところがある。詩の面白さでもある。送られてくる同人誌には純然たる同人誌・会員誌・個人誌などいろいろある。今回はその同人誌を紹介がてら作品も見ていきたい。

「波蝕」28号は荻野央の一人詩誌。詩、エッセイに写真も入つたおしゃれな詩誌だ。

「交野ヶ原」は同人誌に見えるが、金堀則夫の個人誌である。今号90号。一九七六年から年2回、編集発行、費用負担もすべて一人で行つて45年間続けてきている。偉業である。全国の優れた詩人の詩、最新の詩集などの評論も載せる。彼自身もすぐれた詩人である。その中から「野木京子」そんなことも言った」の不思議な詩を見てみよう。

眠りの海に浮かぶ小さな葉っぱの島にいるとき

戸口をふたりのひとが並んで訪ねてくれた私の背中から出てきたかもしれないそのひとたちは

そのまま二重の螺旋になり 絡み合つて続き

枝分かれしてそれぞれの螺旋はさらに続き滝となつて見えなくなる海の果てまで長く

伸びていった

おまえも螺旋の流れに入っていくのだから死ぬことなど怖くはないでしょうと

いにしえから鳥に住む

生まれたての犬のようないきものが

片隅で尾を丸めて

顔をあげた

いなくなつたひとについて考える

それらのひとをいつまでもいとしく思うのは

は

二度目に失うことがもうないから

生きているひとのことはいつも見失い続けているのにねと

尾を丸めたいきものは

そんなことも言った

こんな詩を読むと、何だろう、螺旋はDNAのことだろうか、オーブの河？などいろいろ考えを巡らせる。生きているひとのことはいつも見失い続けているのにね、と言われ

るとはつとす。富岡悦子「道」もヨーロッパ的な物語があつて私の好きな作品である。

「いのちの籠」は「戦争と平和を考える詩の会」の会員の詩誌である。渡辺えみこ「この

世界でない世界は」では

鉄の武器などいらぬ
かんたんに人を殺すことができる

たった一つの汚名で

人の明日を破壊することができる言葉
名指された人は深く取り込み
ただ疲れて 疲れて

(略)

逃げる場所はあるか
この世界の底の底 そのまた向こうに
人を殺す言葉のない世界
そんな世界は あるか

言葉を扱う詩人であるから、言葉の恐ろし
さを知っているのである。戦争と平和の詩の
中では少し異質であったので取り上げてみた。
「軸」139号も大阪詩人会議の会員誌である。
今回は「コロナの時代、一年が過ぎて」とい
う特集を組んでいる。これも季刊誌。

「潮流詩派」264・265号も同人誌というより
「潮流詩派の会」の会員誌と言えるだろうか。
編集発行人の麻生直子は、故村田正夫氏の席
をいまだに用意している。詩・エッセイ・書
評・マガジン評まで載せている季刊の総合雑
誌であるから編集は大変だと思う。

その中から土屋衛「都会の憂鬱」

都会の黒い空に星はない

青ざめゆがんだ月が張りついている

(天の川を見た人はいない)

隣家の扉が開き ひとり警官が立っている

(通報四日過ぎて来た)

「亡くなりました」と言う

十年來話したことのない

さびしい男の孤独死

(略)

おれは老いてひきこもり
さびしい生涯を生きてきた
団地の住人は姿を見えず
互いに関心なく

(略)

おれは死後六カ月発見された
肉を捨て 煩惱を捨て
身軽な骨になっていた

「となりのT君 次は君の番だ！」

老人の孤独死を歌っている。都会の孤独で
もある。「となりのT君 次は君の番だ」が
効いている。改めて詩を書く仲間がいること
はいいことだと痛感されているのだろう。

「PO」180号は、竹林館が出している総合詩
誌。毎回特集を組んでいる。今回は「記憶・
ことは・モノ」。韓国現代詩の今、なども載せ
ている。関西の出版社で、これだけの季刊詩
誌を出しているのは竹林館だけだと思う。

ハラキンは「ノンフィクション100%」地か
演技か「真っ白な大きい」と連続で、演技
ということを追求していく。

真っ白い大きなお皿には 何も食べべもの
が無かった。そのことが彼のイメージと欲
望をかきたてたらしい。幼児は 皿の上に
好きな食べものがあるかのように 手をの
ばしてお皿の上で食べものを掴み 食べる
真似をはじめた。そのジェスチャーが母親
との飯事という遊戯につながった。

二歳にならない人間が ある特定の真
似をする。「真似 マネ」という言葉を知
らなくても それを生けることが あき
れるほど幼いときから 人間にはできる
ということ。

(略) (「真っ白な大きい」)

人間は進化のどのあたりの段階で演技とい
うものをするようになったのか。また、なぜ
人間は演技をするのか。面白い命題だ。

さて同人誌に移ろう。「Les alises」は201
号を数える。二カ月に一冊出ている。30名を抱
える大所帯である。メンバーに入れ替わりは
あるが、初期のメンバー10名ほどが残って支
えている。相野優子「新しい春には」

あたらしい暦の

あたらしい月には

古い暦の中からひとつずつ

凜として美しかったものを
差し出して渡りたい

元且には曾祖母を

六日には祖母を

十七日には長田の叔母を

最後の日には蛭子さんを

(略)

ストロベリームーンに乗って睦月の空に昇
って行った息子の中学校の先生であった蛭子
さんへの追悼詩であるが、一連目がいかにも
相野らしい詩である。以倉絃平「蛭蝶」も、

晴れた初秋のお昼過ぎ

一匹の蛭蝶が

家の垣根近くを飛んでいるのを見つけた

(略)

そっと指を近づけると

継ぎ目の細い溝から

さも懐かしそうに 私の指先に移動してき

たのだった

指先に止まって

どれほどの時間が経過しただろう

ひとである私には ほんの束の間のように

思われたが

一〇年だったか 二〇年だったか 三六年

だったか

(略)

一〇年前に亡くなった娘さんが小さな蛭蝶
になって、懐かしい我が家に帰ってきたに違
いない、と思う父親の姿が切ない。

「RIVERIE」174・175号も隔月発行である。

詩誌を隔月に出すのは大変なことだ。市原礼
子「今日という日に」では

今日こそは 考えるだけでわたしの胸はど
きどきしてくる 今日という日を 留め
ることができるのは 自殺者だけ 生き延
びる人にとって今日は過ぎてゆくただの一
日 わたしは今日 この世界にさよならす
る そう決めたのだ(略)

結局 何処かで見えた自殺の名所の崖の端か
ら荒れ狂う海を見下ろし、死にたくない死に
たくないと呼ぶ自分の声で目が覚めるわけだ
が、弱々しい声の子猫を拾い、「今日は子猫と
共に生きよう今日という日が過ぎてゆく」と、
いい着地の詩だ。

「詩遊」69号・発行人富上芳秀。詩集を持つ
メンバーも多い。詩とエッセイ、「詩について
のメモ」(詩集評)が載る。大工美与「本当は」

ひどく喉が渴いているとき

コップ一杯の水を与えてくれた人が

とてもいい人と思えて結婚

まっすぐな思いで

深刻な日々など来ないと信じて

(略)

でもいつの頃からか

わたしの中に誰も知らない小さな空隙

(略)

それでも

時にあきらめることも知恵と悟りつつ

お互いまもなく八十歳

(略)

今夜、夫にこう言おう

私の心をここに置きます

あなたの心も出して下さい

生まれ変わっても同じ景色に

身を置くのかどうか

もう一度よく確かめてみましょうよ

私は感動して読んだ。そうだ、結婚なんて
騙されなければできないもんじゃない。騙され
たがいけなければ勘違いと言ってもいい。だ
って他人同士が暮らし始めるのだから。それ
にしても、まもなく八十歳。それでも心を開
いて話し合おうとするこの勇氣。これが詩人
の心意気でなくて何だろう。こんな詩を作り
出した大工さんに乾杯したい。

「笛」295号・金沢を拠点に長く続いている詩誌。米村晋「カルーセル・エルドラド」―時を超えて―は、豊島園の回転木馬の詩である。

一九〇七年 ミュンヘンで造られ
世界最古の世界機械遺産に認定
製作はドイツの著名な遊技場経営者
ヒューゴ・ハッセ

(略)

ハッセの一人娘 アン
飼っていた仔馬を病気で亡くし
ひどく悲しんでいた
ハッセはアンのために
回転木馬「黄金郷」を作り

(略)

死んだアンの仔馬に似せた木馬を造り、鬣に隠して金のティアラを付けフィリーと名付けた。「黄金郷」はドイツからアメリカに売られ、一九七一年、豊島園でデビュー。二〇二〇年豊島園閉園のセレモニーの終わった夜、

フィリーは宙に駆け登る
風にみだれる鬣の間から
輝く黄金のティアラ

故郷ミュンヘンの暗い森を目指し
無料無辺の空を飛ぶ

幽かに聴こえるアンの呼び声を辿り
遙かなる時を超えて

(略)

「現代詩神戸」272号・神戸の人を中心にした同人誌だろう。最近同人誌も名簿を出さないとこが増えているのでわからない。今猿人「Six-teens 拾遺」は連作の一部だろうか。

〈その25〉

耳をすませていても何も聞こえない
目をこらしても何も見えない
暗い穴の中に閉じ込められでもしたように
「ない」という事を肯定している日

(略)

辞書を引いては原因の言葉を探し出す
足りなければ新しく作りさえするけれど
「ない」という事が肯定できないように
頭の痛みは いっこう治りはしない

頭が痛いのはきつと低気圧のせいだと見ても
ない聴いてもないものせいでして。

詩誌のあとがきに、(これは大変珍しいこと
とだけれども) 現掲載詩の寸評が載せられ、
今猿人と豊原清明について書かれていた。今
猿人の詩は連作であるから解る。しかし、私は
高偏差値の人間ではないので、豊原清明の
「戦地前線街角で」が読み取れないのである。

たとえ中也賞、晩翠賞をもらった詩人であっても。響いてこない。この詩から届いてくるのは不思議な飢えだった。

「どうるかまら」29号・発行人瀬崎祐。岡山

を中心といい書き手をそろえた同人誌である
編集後記に津山の詩人故山下晴彦氏のこと
取り上げられていた。私も津山出身で、山下
氏とは「アリゼ」で一緒だったので、懐か
しく読んだ。忘れられてないのが嬉しい。

「木立ち」138号・福井を中心に行けられて
いる詩誌。発行人は川上明日夫。最近メンバ
ーが続けて詩集の刊行している。
やまうちかずし「みず」を紹介しておこう。

葉っぱの先の いってきつつゆ

光のなかに むすばれた黄泉

太古から続く いのちの鼓動

木の幹に 耳をあててきこえるもの

知っているよ この音

ははのおなかのうみのおと

(略)

みずべに舞う ホタルの灯明

もう 準備はすみましたか

葉っぱの先の いってきつつゆ

いろいろな水の表情を描いてゆく。母のおなかの中で聞きたいのちの鼓動。花で飾られた祭壇の白い棺、曼殊沙華ゆれる向こう岸、ホタルの灯明。そして、「もう準備はすまましたか」が気になるが、こう問われると、どきとすると、「葉っぱの先の、いつてきのつゆ光のなかに、むすばれた黄泉」そんな黄泉なら行ってもいい気がしてくる。

「りんごの木」57号・少人数だが北海道、滋賀、東京など全国区の集りである。山本英子の不思議な物語詩が好きだったが、今回の「鮎跳ねる」の物語はどうだ。

あの人があなたに来る
焼ける日を踏みながら

噴きあがる正午

飛び散る蟬しぐれ

無言であの人は強くあなたを望み

あなたは燃える腰の手にあの人を受けとめる

凍る肺のかなしみ 灰のかなしみ

(略)

声もたえずに三百六十四日 あの人を目と口

のない面を彫りつつけ

残る一日 最後の土曜日

焦げて立ち上がってあなたに来る

(略)

鮎が跳ねる ガラスの器の

菓子の鮎が 跳ねる

焦げるような熱と、氷のような冷たさが同時に襲ってくる。これも愛なのだろうか。冷淡な、しかし熱いその男が、立ち現れてくるようで、ぞくぞくしながら物語を読む。肌感覚として伝わってくるから不思議だ。

「ひょうたん」73号 発行所は横須賀だが、同人は全国区である。面白い詩がたくさんある。相沢正一郎の散文詩は定評があるから、今回は水嶋きょうこ「糸」

1 窓際

キッチンテーブル、無造作におかれた裁縫箱の隣で何本かより糸がからまつている。窓から光がこぼれ、ふるえるその先端に触れている。からむ糸はそれぞれの頭をもたげ、どこに向かおうとしているのか。

青々とした小松葉をあらった後の流しの桶に、私はたっぷりと水をはった。まきつく擦糸をていねいにほぐし、水のなかにときはなした。細糸はゆらぎ、泳いでいく。

(略)

3 放つ

河原に、汚れた荒縄がとぐるをまいておちていた。土手には雑草がおいしげり、しめつた草の香りが縄をおおっている。荒縄の割れめに種子がはいったのか、いくつも小さな芽がはじめていた。のびる芽は、育

ち、地上に無数の糸をときはなつだろう。
……(略)……

この糸をテーマにした散文詩、名詞には漢字を使うが、おちる、おいしげる、のびる、ではじめる、ときはなつ、など動詞をかなにして面白い効果を出している。触手を持つ糸が燃え出す不気味さ美しさ。

「異郷」56号(第二次) 犬塚昭夫さん亡き後、第二次になつても、相変わらずヒューマンな詩を中心におき、よく続いていると思う。

「冒険」592号・月刊である。亜細亜青年詩人会発行。発行所は大学らしい。詩は少ななくて、エッセイがメイン。どちらかというと社会問題を扱ったものが多い。漢字文化圏の読者を考慮して、とあるが、書き手はどんな人たちののだろうか。

「ぼとり」61号・たけにしよしかずの個人誌。毎回テーマを掲げた詩と「万葉集を読む」などの連載。今回のテーマは「起源、始まり」

「飛脚」27号・石毛拓郎の個人誌。不定期刊というのが面白い。詩とエッセイ。エッセイはゆつくりじつくり読みたいと思える。

「凛々佳」4号・凛々佳の個人誌。若者？

「石ノ森」186号・190号・〈交野ヶ原ポエムの会〉発行人美濃千鶴。「交野ヶ原」から誕生

した詩誌。金堀則夫さんから独立した女性達

「K A I G A」116号・〈グループ絵画〉発行

人は原口健次。発行元は大阪。寄稿文芸誌と銘打つてある。同人誌ではないのだろうか。

「小手鞠」20号・大阪文学学校の昼間部詩とエッセイ卒業の仲間で年二回出している詩誌。

「三重詩人」253号・〈三重詩話会〉一九五〇年創刊、歴史ある詩誌である。

「砕氷船」35号・森哲也・苗村吉昭の二人誌である。森は詩と小説を、苗村は詩と評論

である。若き藤村、近江をゆく」を載せている。

「いのちを抱いて歩もう」——コロナを克えて

——は、関西詩人協会の緊急アンソロジーである。協会代表左子真由美は「孤立から連帯へ」と書く。この、百年に一度遭遇したパンデミックに、数十人の人がそれぞれの対応を、覚悟を、書いた。記念すべき冊子である。

「第八回・かなざわ現代詩コンクール受賞作品集」は、石川詩人会主催の「現代詩コンクール」の受賞作品集である。恥ずかしながら、このコンクールの存在を初めて知った。今回、課題詩部門は「新たな日常——コロナウイルス禍をふまえて」と自由題部門に分かれていた。課題詩部門での受賞作品は全国各地からの応募で、かなりの力作ぞろいであった。

* *

同人誌にはそれぞれ特徴があつて、同人同士が影響を与え合っているのが感じられるものがある。似たような作品になっている場合

もあるが、張り合つた緊張感のあるものがある。そこが同人誌のよさだろう。いつも楽しみに読ませてもらっている。